

『ナウシカ』再考

— 劇画版『風の谷のナウシカ』における終末論その2 —

十 津 守 宏

Historical Theology versus Animistic Cosmology

— A Study of Eschatology on the Comic 'Kazenotani No Nausika.' —

Morihiro TOZU

This paper studies the comic 'Kazenotani no Nausika' (Nausika on Kazenotani). The comic drawn by H. Miyazaki was published on an animation fun magazine Animejyu over ten years. Miyazaki was also the director of the much known animation film version of 'Kazenotani no Nausika.' There is a difference between the film and the comic about the heroine Nausika's role on the story. While she dies for people as a reliever 'the dressed in blue' and there is seen a kind of relieving myth in the film, Miyazaki tries to deconstruct this mythical motif in the comic. This study shows the reason why the relieving mythical motif should be deconstructed, analyzing the story with a comparative method of culture and religions. It will be appeared that a conflict between Western historical theology and Oriental animistic cosmology lies on this story.

序

本論では、再び『風の谷のナウシカ』の劇画版を考察の対象として取り上げたい。劇画版『風の谷のナウシカ』（以降、便宜上劇画『ナウシカ』と略称する）は、十数年の期間にわたって月刊『アニメージュ』誌上において連載された宮崎駿の代表作の一つである。そこでは、20世紀末におけるエコロジーと生態系破壊、ユートピア思想とその限界等の諸問題が扱われている。筆者は本作品については、既に「歴史神学と汎神論的世界観の対決」『世間話研究』第九号において、東洋的汎神論と西洋の歴史神学の対立を軸に論じているが、本論では、現代におけるエコロジーと終末論の問題を軸に前回の考察をより深化させる形で論をすすめたい。

第一章 劇画『ナウシカ』における終末論

劇画『ナウシカ』は、明らかに終末論的世界観を背景として物語が組み立てられている。それは、厳密な意味においては単に終末論的というだけでなく黙示文学的と見做し得るものである⁽¹⁾。黙示文学的表象——終末論における普遍化・宇宙論化とそれに伴う歴史喪失、現行の歴史と世界に対する諦念から生ずるところの彼岸的志向性というものは、実存としての人間存在そのものにとって耐え難い厳しい歴史的現実との出会いから生ずるものである⁽²⁾。終末論と歴史への意味付けが、キリスト教における歴史神学思考のような外在的なものであれ、ヘーゲルの歴史哲学のそれのように内在的なものであれ、どちらにせよその終末論的完成の表象として、彼岸的な「約束の地」の如き黙示文学的表象が現れてくることは、既にエリアーデが指摘しているように歴史主義的解決の限界を表象するものに他ならない⁽³⁾。かつてのユダヤ教黙示文学でもそうであったように、その彼岸的な「約束の地」は現行の世界と歴史の歩みが目的を達することによって辿り着けるものではなく、現行の世界と歴史を破棄することによって到達出来るものだからである。即ち、目的ではなく終りなのであり、歴史の成就ではなく、創造と歴史の遡行とやり直しなのである。そして、この立場にたつものは、黙示文学の担い手らと同様に現行の歴史の歩みが持つ意味について語ることはない。そこにあるものは、歴史的に経験され得るような「救済」に対する絶望とその裏返しにある彼岸的・非歴史的な「希望」だからである。それゆえに、歴史の目的としての終末論的完成の像に黙示文学的な歴史喪失としての彼岸的なユートピア像があらわれてくること自体が、歴史主義の限界を表象しているのである。

劇画『ナウシカ』という作品は、まさしく先に述べたような黙示文学的終末論を展開している。この作品が舞台とする近未来は、「火の七日間」と呼ばれる最終戦争の千年後の世界である。それは、最終戦争により高度な産業文明が崩壊し、その最終戦争後に発生した有毒の瘴気を発する「腐海」という菌類の森とそこに住む蟲という攻撃的な生態系に、人類がその生存を脅かされながら生きているという絶望に満ちた世界である。その一方で、人々の間には、「腐海」の有毒な瘴気や蟲に脅かされない「青き清浄の地」とそこへ人々を導く「青き衣の者」という救済神話が流布しており、ささやかな「希望」となっている。しかし、その有毒の瘴気を発する「腐海」は実は汚染した大地を浄化するために人為的に創り出された「目的を持った生態系（第七巻p.132）」であることが物語の中で次第に明らかにされる。そして、その計画の一環として旧世界から新世界へと伝えるべき人類の遺産を保存している「庭」の主は、その「庭」に立ち寄った主人公ナウシカに対して以下のような事実を告げるのである。

庭の主「そなた達は腐海の意味に気づいているはずだ。なぜ腐海の尽きる所にすめないかを。

腐海がその役割を終えた時は共に滅びる時だとも」

（『風の谷のナウシカ』第七巻p.128）

ここで「庭」の主が語る「腐海の尽きる所」とは、この劇画版『ナウシカ』におけるユート

ピアたる「青き清浄の地」のことである。しかし、その希望であるはずの「青き清浄の地」は、以下に引用するこの「庭」の主との対話から明らかにされるように、現行の世界に生きる人々が、決して辿り着くことが出来ない彼岸的ユートピアなのである。

庭の主「肉体は拒絶され心でしかたどりつけない土地をなぜ希望などといつわりつづける」
(第七巻p.128)

そして、ナウシカ自身も以下のように述べるのである。

ナウシカ「浄化された世界に憧れても、私達はそこでは生きられない。」(第七巻p.130)

また、その浄化のプログラムは人間自身の手により仕組まれたものである。

ナウシカ「火の七日間の前後、世界の汚染がとり返しのつかぬ状態になった時、人間や他の生物をつくり変えた者達がいた。同じ方法で世界そのものも再生しようとした……」
(第七巻p.131)

「千年前人間は絶望の淵にあったのでしょうか。必死に人々は希望を見つけようと努力した……生態系をつくり、生物をつくりかえる技は、この庭の維持にいまも生きています」

(第七巻p.132)

劇画『ナウシカ』における終末論——黙示文学的色彩を帯びた——とは、作品中に実際に描かれているような大海嘯による現行の世界の破滅ではなく（このこともたしかに終末論的なモチーフであるが）、旧世界の人間達によって仕組まれ計画された「腐海」による世界そのものの浄化計画である。黙示文学とは、本来的には現世への絶望の裏返しにある新世界への「希望」を謳うものである。終末の後には必ず再生が伴う。単に滅亡を謳う終末論は終局主義というべきものであって終末論ではない。この劇画版『ナウシカ』が展開する終末論とは、——それは短期的視野にたつ大海嘯などではなく、また、「火の七日間」という最終戦争による産業文明の滅亡でもない——この「庭」の主が語る「腐海がその役目を終えた時、共に（旧世界に属する人類も）滅びる」という長期的かつ緩慢な人類の種としての滅亡と、腐海がその役目を終えると同時に回復する清浄な世界とそこに住むこととなる「おだやかな種族として新たなる世界の一部となる人類（第七巻p.200）」という人類と世界の「死と再生」の構図により規定されているそれなのである。そして、この作品が展開する「死と再生」という構図に基づく終末論は、明らかに終末論的であるだけでなく、黙示文学的なそれへの傾斜を示している。この作品の中でも、「腐海」による生態系の回復という世界の再生への歩みは確実に続けられている。しかし

その歩みの成就とは、旧世界そのものをそこに属する人類もろとも破棄してしまうような黙示文学的な滅びからの再創造なのである。黙示文学的希望の本質とは非歴史的なものであり、それは現行の世界に対する諦念と絶望により規定されるものである。同様に、この作品でも旧世界に対する可能性は「庭」の主が語るように、人間自身の手による浄化の計画という終末論の中では否定されている。このことは、物語の初期の主人公ナウシカの師であるユパの言葉にも既に現れている。

ユパ「古い生物群が新しい生物群にとってかわられた例はこの星の歴史になんどもあったことだ。しかし、その場合でも新旧の交替はゆるやかな生態系の変化としておこなわれた。腐海の植物群や蟲たちはそれとちがう。——中略——腐海の生物は旧世界の全ての動植物を滅ぼそうとしているかのようだ。」

(第一巻p.92)

また、人間自身による自然環境を回復させる計画を司る「浄化の神」である「墓所の主」と主人公ナウシカの対決の言葉からも、同様の志向をより決定的な形で読み取ることが出来よう。実際には、現行の旧世界に属する人々が辿り着けない「青き清浄の地」への「希望」を語る「墓所の主」に対してナウシカは次のように述べているのである。

ナウシカ「なぜ真実を語らない。汚染した大地と生物をすべてとりかえる計画なのだと。

——中略——お前は滅ぼす予定の者達をあくまであざむくつもりか。」

(第七巻p.197-198)

これに対して「墓所の主」は、「すべてを未来にたくすことにした。これは旧世界のための墓標であり、同時に新しい世界への希望なのだ。」と述べる。ここで述べられている時間的前方へと投影された終末時（劇画版『ナウシカ』においては腐海がその世界を浄化するという役割を終える時である。）を基点とする旧世界と新世界の二元論もまた単に終末論的であるだけでなく、明らかな黙示文学的表象なのである。また、ナウシカは「墓所の主」に対して「だがお前は変わらない。組みこまれた予定があるだけだ。」とも述べているが、この「墓所の主」による浄化の計画の予定調和的・決定論的性格というものも、黙示文学のそれとの親近性を示している。

一方で、この作品が展開する終末論は、近代以降の歴史主義から生み出された「社会神話」としてのユートピア思想との構造的類似性を示してもいるのである。なぜなら、汚染された世界の「腐海」による浄化の計画は、歴史に超越し「絶対他者」として介在するユダヤ・キリスト教的な神の「摂理」により課されるものでもなければ、自然に本来的に備わっている自浄能力、古代の思想の多くにみられる宇宙と自然の円環的時間観に基づく周期的再生でもない。歴史そのものの内在的進展によるものだからである。

我々がここで注目しなければならないのは、理念上は人間自身が紡ぐ歴史の内在的進展としての歴史的ユートピアである「青き清浄の地」に、反歴史的解決——歴史の「完成」としてのそれではなく、これまで見てきたように歴史の「終り」としての黙示文学的表象が与えられているということである。キリスト教的千年王国論やヘーゲル以降の歴史的ユートピア像は、常に歴史の完成として、歴史が段階的に向かう目標として把握されるものであった。それゆえに、そのユートピアとは、現行の歴史の延長線上に連続性の持つものとして考えられてきたものである。しかし、劇画版『ナウシカ』の「青き清浄の地」であるユートピアは、明らかな現行の世界と歴史に対する不連続性と断層を示している。このことは、今世紀に我々が経験した歴史主義的進歩史観の崩壊、そして作品中の様々な表象に含意されているようなエコロジーと生態系破壊などの進歩史観を真っ向から否定するような歴史的現実との出会いと関係付けられよう。そのような反歴史主義的傾向を示す歴史的現実との出会いの中からも、なお歴史の目標としてのユートピアの可能性を求めようとするならば、それは現行の世界と歴史からの断絶を前提とした黙示文学的転換——作品中の表現を借りると「汚染した大地と生命をすべてとりかえる(第七巻p.197)」という転換——を前提としてでしか表現し得ないということ、この作品におけるユートピアに与えられた彼岸性・非歴史性——「肉体は拒絶され心でしかたどりつけない土地(第七巻p.128)」と作品中に表現されている——が表象しているということなのである。このユートピアの彼岸性・非歴史性というものは現実の歴史の展望への絶望と表裏一体であり、そこにはエリアーデが述べているところの「歴史の恐怖」への治療の秘策⁽⁴⁾が横たわっているのである。であるから、この章の冒頭でも述べたように、その反歴史的解決という表象が、歴史の目的としてのユートピア像に現われてくること自体が、近代以降の社会神話と歴史的ユートピアが包含する歴史主義的解決の限界を表象しているのである。この意味において劇画版『ナウシカ』が展開する終末論とは、近代の歴史主義の廃墟から生まれた現代版の黙示文学とでも言うべきものなのである。

第二章 西洋的歴史神学と東洋的汎神論の対決

劇画版『ナウシカ』では、人間自身により仕組まれた黙示文学的なユートピアと「救済」は拒否されてしまう。この作品の結末において、主人公ナウシカは、「腐海」による汚染された世界を回復される計画の中樞を担う「墓所の主」を破壊してしまうのである。本章では、劇画版『ナウシカ』におけるこの結末を、ユダヤ・キリスト教の伝統にその端緒を持つ西洋的歴史神学とそれに対して対応関係にある東洋的汎神論との対決という視点から論じたい。

汚染された世界を元の清浄な世界へと回復させるという「目的のある生態系(第七巻p.132)」としての「腐海」は実は人為的に生み出されたものであった。従って、そのユートピアは理念上は歴史の内在的進展の目標であり、歴史の完成として把握されるものなのである。しかし、その地は旧世界に属するもの全てを拒絶してしまうような彼岸的なユートピアであり、目的というよりは歴史の終りとしてのユートピアである。前章では、ここに近代以降の歴史主義的解

決の限界とその結果としての黙示文学的思考への接近を読み取ることが出来るということを指摘した。

その終末論——人為的な浄化という——による解決と「救済」をナウシカは拒絶する。その終末論的解決と「救済」——歴史の歩みを成就するのであれ、終らせるのであれ——その拒否は既に「墓所の主」との対決に先立つ作品の随所に予告されている。

上人「神は語っています。旧き世界は滅び、永い浄化のときが来ると……。——中略——滅びは必然です。神聖皇帝の愚行すら、その一部なのですよ。すべての苦しみは世界が生まれかわるための試練なのです。」

ナウシカ「ちがうわ！私たちの風の神様は生きろといってるもの。わたし生きるの好きよ。光も空も人も蟲もわたし大好きなもの！」

(第五巻p.91)

この上人の言葉——ナウシカがはっきりと否定する——には、古来より度々用いられてきた典型的な「死の再生」の終末論的モチーフを認めることが出来る。そして、「墓所の主」との対決に先立つ「庭」の主との対話の場面でナウシカの終末論的「救済」への拒否は、より明確なものとなるのである。

庭の主「みな自分だけは過ちをしないと信じながら、業が業を生み、悲しみが悲しみを作る輪から脱け出せない。この庭はすべてをたちきる場所。」

(第七巻p.122)

終末論が持つ機能とは、この「庭」の主が語るような呪いの円環を断ち切ることに他ならない。真の意味においての終末論とは、多くの古い思弁にみられるような時間の周期性、そしてその中での人間の逃れ難い過ちの連鎖からの解放をもたらすものだからである⁽⁵⁾。この意味においては、この「庭」は終末論的機能を与えられた空間であるとも呼び得る場所なのである。その「庭」の主は、人間を救うために「庭」を出ようとするナウシカにしみじみ「そなたのしようとしていることはもう何度も人間がくり返して来たことなんだよ（第七巻p.125）」と述べる。しかし、ナウシカはこの「庭」の主に対して「自分で壊しましたが、あなたの下さった安らぎの一瞬を忘れません（第七巻p.135）」と述べて「庭」を出る。従って、この「庭」におけるナウシカの行動とは、この作品の最終局面における終末論的解決と「救済」の拒否を予め予告するものと見做して差支えないであろう。そして、そのナウシカは浄化の計画を司る「墓所の主」との対決の中で、人間の手により仕組まれた浄化の計画を拒絶に至るのである。

「墓所の主」は、「墓所」を尋ねたナウシカにこの世界の秘密——「腐海」というものの存在に隠された意図——について以下のように語るのである。

墓所の主「自らの愚かさゆえ空しく亡びたあまたの人間を代表してそなたたちに伝えたい。永い浄化の時にそなたたちはいる。だが、やがて腐海の尽きる日が来るであろう。青き清浄の地がよみがえるのだ。浄化のための大いなる苦しみを罪への償いとして、やがて再建へのかがやかしい朝が来よう。子等よ、私達はこの墓を絶頂と混乱の時代に英知を集めて建設した。その朝が来た時、世界の再建に力になるようにと。わが身体に現れる文字を読み、その技を伝えるがよい。すべての文字が現れた時、その日が来る。苦しみが終わる日が……子等よ……力を貸しておくれ。この光を消さないために……。」

(第七巻pp.195-196)

しかし、ナウシカは、以上のように語りかける「墓所の主」に対してはっきりとした「否」を發するのである。では、このような「救済神話」の拒否・解体という結末へと導いた動機は何なのであろうか。ここで我々は、この動機を明らかにするためにも、作品中随所にみられる東洋的汎神論への接近を取り上げたい。東洋的汎神論は、ナウシカの人間により仕組まれた浄化の計画との対決・対話の場面において、必ずと言っていいほどに意図的にそれに対するアンチテーゼを掲げるものとして登場してくるからである。例えば、この作品のクライマックスとも言える「墓所の主」の対決の場面において、ナウシカは以下のように述べているのである。

ナウシカ「私達の身体が人工で作られ変えられていても私達の生命は私達のものだ。生命は生命の力で生きている。その朝が来るなら私達はその朝にむかって生きよう。私達は血を吐きつつくり返しくり返しその朝をこえてとぶ鳥だ。」(第七巻p.198)

「私達の神は一枚の葉や一匹の蟲にすら宿っているからだ。」(第七巻p.208)

このナウシカの言葉は疑う余地もないほどはっきりと東洋的汎神論的世界観への接近を暴露している。そして、この東洋的汎神論的世界観は、先に引用した最終局面における「墓所の主」との対決以外の場面においても意図的に人間による浄化の計画との対話に際して登場させられている。

ナウシカ「たった数千年で腐海は不毛の大地を回復させようとしています。その役目がすんだら亡びるようにも定められている……。目的のある生態系……その存在そのものが生命の本来にそぐいません。私達の生命は風や音のようなもの……生れひびきあい消えていく。」(第七巻p.132)

「どんなにみじめな生命であっても生命はそれ自体の力によって生きています。この星では生命はそれ自体が奇蹟なのです。世界の再建を計画した者達がああ巨大な粘菌や王蟲達の行動をすべて予定していたというのでしょうか。ちがう。私の中で何かがちがうと叫びます。あの黒いものはおそらく再建の核として遺されたのでしょうか。そ

れ自体が生命への最大の侮蔑と気づかずに。」(第七巻p.172)

ここでも、ナウシカはその人間の手による浄化の計画にはっきりとした「否」を表明している。更に、それが「生命への最大の侮蔑」であるとさえ述べているのである。ここでは、人為的に仕組まれた浄化の計画が、人間がバイオテクノロジー等で手を加える以前の本来の姿としての自然との類比において生命の本来の姿と尊厳を失わせしめるものとして、否定されているのである。それ故に、この作品の人間の手により仕組まれた「救済神話」の解体という結末は、「大地の富をうばいとり大気をけがし生命をも意のままに造り変える(プロローグ)」文明に対する「否(Nein)」を、そして「それ自体が奇蹟(第七巻p.172)」であるという生命本来の姿——即ち自然に対する無条件の「然り(Ya)」を述べたものとして結論付けることも出来るのである⁽⁶⁾。

しかし、この作品に「救済神話」の解体という結末をもたらした要因を単なる文明と自然の対立にのみに求めることは早計である。既に先行研究が指摘しているように、この劇画『ナウシカ』においては文明と自然という単純な二元的対立は失効しているからであり⁽⁷⁾、また、この劇画『ナウシカ』という作品は、アニメ映画版のそれと同じく当初は、自然と文明の二元的対立とその調停者であり救済者としての主人公ナウシカを通してのこの「救済神話」の成就という形での完結を意図していたことが明らかであるからである(第二巻の巻末を参照)。即ち、この長期にわたって書かれ続けたこの作品の完結への中途で何らかの転換が起こったのである。そして、人間により仕組まれた「浄化の計画」の拒絶にあたって示されている東洋的汎神論的世界観への歩みよりは、現代の黙示文学ともいべきこの作品の終末論とその解体という結末への転換を、よりよく明らかにするにあたって重大な示唆を含んでいるのである。

なにゆえに、この劇画『ナウシカ』における救済神話は解体されてしまったのか。社会神話としてのユートピアの解体という事象は、二つの世界大戦とそれに伴う「西洋の没落」、地球規模で進行する生態系破壊を経験した結果としての歴史主義的進歩史観の破綻の影響とも解釈出来る。稲葉は、この作品における当初の作者宮崎により意図されていた「救済神話」の成就という結末からその解体という形への転換に、20世紀におけるマルクス主義の崩壊、冷戦体制の終焉等といった歴史的現実が引き起こしたユートピア思想の破綻の影響を指摘している⁽⁸⁾。しかし、その歴史主義の破綻という我々が経験している歴史的現実の前章で既にみたように、むしろ反歴史的解決としてのユートピア・歴史の「目的」ではない「終り」としてのユートピアという表象にこの作品では内包され表現されているのである。歴史の「終り」としてのユートピア像を掲げる黙示文学的希望は、歴史の進展と先行きに「希望」が持てなくなった時代にこそ、通時的現象として現れる。そこにある「希望」は、歴史的に経験不可能なものであり、それゆえに絶望に満ちた時代においてこそより輝きを増すからである。この劇画『ナウシカ』は、その黙示文学的終末論を展開しているのである。従って、この作品における救済神話とユートピア思想の解体を、現在、我々が経験している反歴史主義的現実を求めるという解釈は明らかに不十分なものである。また、浄化の計画の解体を、単純に文明対自然の対立の結果のみに

還元してしまうこともまた不十分である。先にも述べたように、この見解は作品中における救済神話の成就から解体への転換に対しては、何らその解答たるものを提供しないからである。我々はこの作品における救済神話とユートピアの解体という結末に、これらのものとは異なった解釈を求めなければならないのである。

ここで、この作品における「浄化の計画」とそれと意図的に対立させられている東洋的汎神論という構図を、自然と文明との対立としてではなく、西洋の歴史神学との対立という見地から、救済神話とユートピア思想の解体という結末を読み解く要素として、我々は考察したい。

人間により計画されたものとしての「浄化の計画」というこの作品の終末論は、キリスト教的終末論の世俗化⁽⁹⁾の結果、そこから生まれた歴史への目的論的価値付けに基づく西洋の歴史神学・哲学的思考への明らかな傾斜を示している。その西洋的歴史神学というものは、ユダヤ・キリスト教が、それまでの古代文明において支配的であった円環的時間と周期理論を放逐し、直線的時間観、季節の循環や天体などの運行からは独立したものとしての歴史という観念を打ち立てたことから生まれたものである。そして、その周期理論からの転換は、「絶対他者」であり、人格神として歴史を導くというユダヤ・キリスト教的な神観念に基づいているのである。歴史に超越しながらも歴史に内在的であり、自らの民を導くために自然を支配し歴史に介入するという神観念を通して、古代イスラエルの宗教はそれまでの円環的時間観と周期理論を破棄した⁽¹⁰⁾。そして、歴史主義的進歩史観——歴史の完成としての歴史内的ユートピア思想——が破綻した時代にあっても歴史を導く神という観念は「希望」の根源的な力であり続ける。なぜなら、そこに残された唯一の「希望」である世界の黙示文学的転換は、歴史に外在し歴史の歩みを総体として支配するユダヤ・キリスト教的な神の存在、そしてその絶対者としての力の歴史への介入を前提として初めて可能となるからである⁽¹¹⁾。そして、この作品における「浄化の計画」に基づく黙示文学的な終末論的転換を司る「墓所の王」の果たす役割・存在論的あり方とは、作品中、自ら「人類はわたしなしには滅びる。お前達はその朝（世界の再生の日）をこえることはできない（第七巻p.201）」と語っていること、また、ナウシカもその「墓所の主」をして「浄化の神（第七巻p.200）」と述べていることなどから容易に推察されるように、まさしく世界の黙示文学的転換に関わるユダヤ・キリスト教的な神観念のそれなのである。一方の東洋的汎神論的世界観の中には、そのような神観念は存在しない。永遠回帰する万物の調和した歩みこそが神なのであり、そこには目的論という思考そのものが存在しないのである。いみじくもナウシカは人間の手による浄化の計画を、「目的のある生態系……その存在そのものが生命の本来にそぐいません（第七巻p.132）」と述べ批判するが、このナウシカの言葉が包含するものは、人間の手により生命がもて遊ばれていることに対する批判だけでなく、目的を与えられたそれという事物の存在論的あり方そのものに対する批判なのである。ナウシカは、この言葉に続き「私達の生命は風や音のようなもの……生まれひびきあい消えていく」と東洋的な響きを持つ言葉で生命の本質について語っている。即ち、この作品のクライマックスにおける「そなた（墓所の主）が光なら、光など要らぬ。——中略——私達の神は一枚の葉や一匹の蟲

にすら宿っているからだ（第七巻p.208）」と述べるナウシカと「墓所の主」の対決が包含するものは、単なる自然と文明の対立だけではなく、西洋的歴史神学と東洋的汎神論それぞれの生命の営みに対する実存理解の相違⁽¹²⁾ そのものの対決なのである。そして、東洋的汎神論への歩みよりを示したこの作品においては、西洋の歴史神学に基づく世界の黙示的転換への「希望」を掲げた「浄化の計画」も世界と歴史への目的論的価値付けも、その实在論的あり方が東洋的汎神論との対立を示すことから、否定されるべきものとなってしまったのである。

以上で考察したように、この作品の根底には、はっきりとした西洋の歴史神学と東洋的汎神論の対決という構図が存在している。それゆえに、そこにおける「救済神話」の解体という結末は、その対立の構図へと還元されるべきである。作品中、随所にみられる自然と文明の自然に対する侵害の象徴としての人間により仕組まれた浄化の計画の対立とは、この東洋思想と西洋思想の対立の構図の中に包含されているのである。なぜなら、この自然と文明の対立をもたらしたのは、西洋文化の根底にあるユダヤ・キリスト教の伝統——旧約聖書創世記1.28の「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這う生き物をすべて支配せよ。」にその端を発する西洋の人間中心主義だからである。換言するならば、この作品における終末論的「救済」の解体には、東洋的汎神論への歩みよりによる、西洋の目的論的な歴史神学と歴史を導く「絶対他者」としてのユダヤ・キリスト教的な神観念、そしてそこから生まれた19世紀以降の人間中心主義への拒絶とともに、特にこれといった目的がなくともただひたすらに歩み続ける純粋で素朴な自然の歩みに対する賛美が包含されているのである。

第三章 「救済神話」の解体と「希望」

ここまで我々は、劇画『ナウシカ』における終末論の本質が黙示文学的なものであること、そしてその終末論的「救済」の拒否という構図の根底には、西洋的歴史神学と東洋的汎神論の対決が存在していることを指摘した。しかし、その一方で、ナウシカがそれにまつわる「救済神話」を拒否したはずのユートピア「青き清浄の地」は、ナウシカの心を捉えたままなのである。このことは、以下に引用する箇所から鮮明に読み取ることが出来る。ナウシカは、旧世界に属する人々にこの作品の世界のなりたちの秘密——腐海の役割等——について語る場面で密かに独白するのである。

人々「いつかは世界はまたきれいになるの?」「いつ?いつ?」

ナウシカ「残念だけどいつだかは判らない。でも、きっとその日が来ます。こうしている時も腐海ははたらいてくれているから、私達が滅びなければ、いつか明るい世界が両手を広げて迎えてくれるでしょう。」

——中略——

ナウシカ「セルム、私は嘘をつきました。これからもつきつづけます。人間は、汚染にあわせて身体をつくりかえてしまった……。でも、それをみんなに伝えて何になるでしょう……。それに、私の中ではげしく何か叫びます。私が見た風景、あなたが案内してくれた腐海の尽きる所。世界はよみがえろうとしていました。たとえ私達の肉体が、その清浄さに耐えられなくとも」(第七巻p.171)

ここでは、「青き清浄の地」にまつわる「救済神話」を否定する筈の主人公ナウシカが、その「青き清浄の地」に惹かれ続けていることを読み取ることが出来る。

また、先にも引用した「庭の主」の言葉をここで再び引用したい。

庭の主「いまは聖地としてタブーになっておろう。肉体は拒絶され心でしかたどりつけない土地をなぜ希望などといつわりつづける？」

この「庭の主」の問い、そして先のナウシカの内的矛盾は、「希望」というものの实在論的な存在意義と深く関わっている。「希望」——よりよき未来への展望というものは人間存在そのものを支える原動力である⁽¹³⁾。高邁な倫理に支えられた一部の人間を除いた大多数の人間にとって「希望」は行動を導き出す原動力なのである。「希望」の喪失——即ち「絶望」は、いみじくもS・キルケゴールが述べたように「死に至る病」である。それ故に、ナウシカは真実を「みんなに伝えて何になるのでしょうか」と独白し、人々にここで偽りの「希望」を語らねばならないのである。そして、それだけではなく、この世界の真実を知るナウシカさえもが依然として「青き清浄の地」に惹かれ、また、世界が浄化される「朝」を無視することが出来ないのである(第七巻p.198参照)。現に、第五巻において「虚無」に食われたナウシカを、その「虚無」の深淵から救い出すのは、「青き清浄の地」の实在——世界の再生への確信に満ちた「希望」なのである(第六巻 参照)。

このナウシカの内的矛盾——終末論的「救済」への「希望」とその否定の並存——に、我々は、エリアーデがいうところの歴史的人間の絶望の叫びを聞くことができよう。ここで、我々がこの内的矛盾の並存を解き明かすためにも検証しなければならないのは、この作品において「人間が汚してしまった世界をきれいにする(アニメ映画『ナウシカ』より)」という自然からの恩恵がもたらすものとして、当初から「希望」として準備されていたはずの「青き清浄の地」にまつわる「救済神話」そのものに、西洋の人間中心主義に基づく歴史神学・哲学的思考——目的論というものが刻印されていたということである。このことは、物語の比較的初期のナウシカとその友人アスベルとの会話にも見出すことが出来るのである。

アスベル「きみ(ナウシカ)はおもしろいことを考えるなあ。腐海の役目か……」

——中略——

ナウシカ「きっと、腐海そのものがこの世界を浄化するために生まれたのよ。太古の文明が汚した土から汚れを身体にとりこんで無害な結晶にしてから死んで砂になってしまうんだわ（第一巻p.134）。」

この会話からは、この物語における「腐海」というもののあり方そのものが、明確に西洋的な目的論の刻印を受けていることが推察されよう。即ち、「腐海」とそこに住む「蟲」という生態系は、環境浄化のために存在し、またそれだけのために活動しているというように目的論的に価値付けられているということである。ここで再び環境浄化機能を担わされた「腐海」の秘密に気付いた場面のナウシカの言葉を検証してみたい。

ナウシカ「いまはすべてがはっきりと見える。恐ろしいほどところが澄んで来た。かくされた意図……。火の七日間の前後、世界の汚染が取り返しのつかぬ状態になった時、人間や他の生物を作り変えた者達がいた。同じ方法で世界そのものも再生しようとした。有毒物質を結晶化して安定させる方法（第七巻p.131）。」

——中略——

「たった数千年で腐海は不毛の大地を回復させようとしています。その役目がすんだら亡びるようにも定められている……。目的のある生態系……その存在そのものが生命の本来にそぐいません（第七巻p.132）。」

ここで、我々はこのナウシカの言葉に作者宮崎自身の自己矛盾の発見の響きを見出すことが出来るのではないだろうか。宮崎はこの作品において、アニメ映画版『風の谷のナウシカ』がそうであったように、自然と文明との対立の調停者としての『ナウシカ』による「救済神話」の成就——人間と自然との和解を描こうとしていたのは疑う余地がない。このことは、第二巻の巻末の場面から容易に推測され得るし、先にも述べたように、「虚無」に捉われていたナウシカを、その「虚無」の深淵から救い出すのは、「青き清浄の地」が実在することへの確信であるからである。しかし、劇画版においても、またアニメ映画版においても同様に措置されている「腐海」の役割——環境浄化装置としてのそれ——というものが、実際は西洋的な目的論の刻印を受け、生命本来の实在論的あり方から乖離したものであったということの発見が、このナウシカの言葉——それは恐らく作者宮崎自身の発見でもある——に集約されているのである。

そして、先に引用した「世界の汚染が取り返しのつかぬ状態になった（第七巻p.131）」というこの作品の設定——この設定そのものは、明らかに現代におけるエコロジーと環境破壊の問題に関連付けられる——が、人為的な作為による「浄化の計画」、目的を与えられた総体としての世界の歩みとその結果としての彼岸的なユートピア像を伴う黙示文学的な転換というこの作

品における「救済神話」を構造上生み出す土壌となっているのである。前世紀末から今世紀にかけての人間の行為による生態系破壊は、まさしく作品中に語られているような「世界の汚染がとり返しのつかぬ状態になった」という歴史的現実を我々につきつけており、我々は古代の思弁にあるような世界の周期性への純朴な信奉に基づく世界の回復という信仰をもはや持ち得ないし、放棄せざるを得ない。従って、再生と「救済」への歩みというものは、自然の周期的再生との類比ではなく、目的を持った総体としての時間の歩み——即ち自然の周期性から解放された歴史という西洋的近代的思想であり、その基盤は黙示文学的世界観により準備された——という観念のもとでしか構造上考えられざるを得ないからである。しかし、他の作品でもそうであったように、文明と自然との対立を軸に思想を展開してきた宮崎にとって、自らが描いた「救済神話」が生命本来のあり方ではなく、むしろそれとの乖離を示す目的論という西洋的近代思想の刻印を受けたいたことは、容認できない事実であった。そして、その宮崎自身の自己矛盾の発見は、以下に引用するナウシカの「墓所の主」に対する言葉の中にも見出すことが出来るのである。

ナウシカ「絶望の時代に理想と使命感からお前がつくられたことは疑わない。その人達はなぜ気づかなかったのだろう。清浄と汚濁こそ生命だということに」

この発見が当初の「救済神話」成就という形で準備されていた作品の完結を、「救済神話」の解体という形での結末へと構造的に急転換させたのである。

古代の多くの文化において支配的であった円環的終末論とは、本論中で述べているような意味においての終末論ではない。それは、その起源が四季の巡りや雨季と乾季の交替などの自然現象の求められているような自然神話であって⁽¹⁴⁾、自然から独立した歩みとしての歴史という観念や目的論とは無縁のものなのである。しかし、それは一方で世界の周期的再生という観念と深くかかわっており、人々に疑い得ない再生への「希望」を植え付けたこともまた明らかな宗教的事実でもある。周期的に満ち欠けを繰り返す月が、多くの文化において再生や不死とかかわる信仰の確立に大きな影響を与えたことなどは、その最たる例であると言えよう⁽¹⁵⁾。しかし、今日における地球規模で進行する生態系破壊は、我々にそのような純朴な自然の再生能力に対する信頼を揺るがさずにはいられないのである。いまや、現代に生きる我々の誰もが、もはや素朴に自然の自浄能力に生態系の回復という「希望」を期待することが出来ないのである。

一方で、ユダヤ・キリスト教は、永遠回帰の周期を一時的なものとし、歴史と時間の直線性・目的論的価値を発見した。その伝統の中から、世界と歴史の究極的目的、あるいは終焉について語る本来の意味においての終末論的思考が導出されてきたのである。この発見の原動力となったのが、歴史に内在的でありながらも超越的であるというユダヤ・キリスト教的な神観念である。そして、近代以降の歴史内的な進歩信仰が破綻した今日では、超越者として歴史に外在しながらも歴史を導く神とその神による歴史への介入こそが唯一の「希望」たり得るのである。

しかし、そのような神観念に基づく「希望」は、この作品の中では東洋的汎神論との対決を通して拒否されていることは、既に見た通りである。

これら「希望」の喪失とその「希望」の实在論的あり方との間の緊張——それは、作者宮崎が作品の中で調停することが出来ず、逆に深い苦悩を作品中にナウシカの葛藤という形で示しているものなのであるが——が、この作品における「救済神話」の解体、その解体という流れの中でも依然としてナウシカの心を捉え続けるユートピア「青き清浄の地」という内的矛盾等の諸問題を規定し、またナウシカの葛藤という形で示されているのである。世界の再生計画を破壊したナウシカ自身、その行為を通して自らが解体してしまったそれに代わるような、種としての滅亡の危機に瀕している人々に「救済」をもたらすような具体的な「希望」を何ら引き出すことが出来ない。そればかりか、「墓所の主」からは、「希望の敵（第七巻p.202）」「お前は悪魔として記憶されることになるぞ。希望の光を破壊した張本人として！（第七巻p.208）」という言葉が投げかけられ、「自分の罪深さにおののきます」とナウシカ自身も述べているのである。また、このナウシカが自ら破壊した「希望」の代わりに提示することが出来るのは、「次の瞬間に肺から血を噴き出しても鳥達が渡っていくように私達は繰り返し生きるのだとも……

（第七巻p.172及びp.198）」というあたかも絶望の叫びをそこに含んでいるような、生というものに対する無条件な肯定なのである。それは、我々にニーチェの『ツァラトストラはこう言った』の思想的中核——嘔吐をもよおさせる永遠回帰の生と存在の車輪の中でもなお生きていかなければならないという——を想起させるものでもある。エリアーデは、世界の循環的観念を捨てて歴史というものに取りつかれた歴史の人間は歴史をメタヒストリカルに導く神の实在とその歴史にその神の導きを認めることによってしか自らを「絶望」から守り得ないことを指摘している⁽¹⁶⁾。神なき黙示文学とも言うべき劇画版『ナウシカ』は、その歴史的人間の「絶望」を表象しているとも解釈出来るものなのである。

結びに代えて

今回の論考においては、前回の論考をより深化させる形で論考を進めた。この劇画『ナウシカ』は、終末論的希望とその喪失——ユートピアという社会神話の解体——の中での、人間と生命の生の意味とその尊厳を探求した文学作品である。そこでは、「希望」の喪失とその「希望」の实在論的あり方との間の緊張が、「救済神話」の解体したナウシカ自身とその「救済神話」にまつわる「青き清浄の地」に惹かれ続けているという内的矛盾・葛藤という形で示されているのである。「絶望」は、「死に至る病」である。従って、人間にとって「希望」とは、生というものを支える根源的な力なのである。この作品におけるナウシカの行動、生への意志は、その「希望」の喪失の中でも揺るぐことがない。そこに描かれているものとは、「絶望」に打ちひしがれることなく常に歩み続けるという「生」のあり方——それは、繰り返される「死」を乗り越えて歩み続ける自然本来の生命の姿——に対する無条件の肯定と賛美なのである。この東洋的思想への傾斜が西洋的な目的論——生命の本来とそぐわない——を拒否し、「救済神話」

の解体という形での結末へとこの作品を導いたのである。

注

- (1) 拙著「歴史神学と汎神論的世界観の対決」『世界話研究 第九号』pp.73-77参照。
- (2) J. Moltmann, Das Kommen Gottes, 171.
- (3) M・エリアーデ『永遠回帰の神話』堀一郎訳, 未来社 pp.190-198.
p.198ではエリアーデは次のように述べている。
「未来の社会の反歴史的解決を, この世のはじめ, もしくは終りにおける黄金時代の楽園的, もしくは終末論神話と比較してみることは興味深いことである。」(堀一郎訳)
- (4) 前掲書pp.192-193.
- (5) 前掲書pp.147-169.
- (6) 自然と文明(人類)との二元的対立は, 初期からの宮崎のテーマの一つである。この問題は, アニメ映画『もののけ姫』において, 最もはっきりとした形で扱われている。
- (7) 稲葉振一郎『ナウシカ解説——ユートピアの臨界』窓社p.85.
- (8) 前掲書pp.101-110.
- (9) R. Bultmann, Geschichte und Eschatologie, pp. 25-30.
W・シュミットハルス『黙示文学入門』土岐健治・江口再起・高岡清訳, 教文館, pp.30-53.
W・パネンベルク『歴史としての啓示』大木英夫他訳, 聖学院大学出版会p.207.
- (10) M・エリアーデ『永遠回帰の神話』堀一郎訳, 未来社pp.137-147.
V・ラート『旧約聖書神学2』荒井章三訳, 日本基督教団出版局, pp.135-153.
- (11) W・シュミットハルス『黙示文学入門』土岐健治・江口再起・高岡清訳, 教文館, pp.234-264.
木田献一『旧約聖書の預言と黙示』新教出版社p.66.
- (12) アニミズムと一神教の実存理解の相違については, しばしば指摘されている。
例えば, 木田献一『旧約聖書の預言と黙示』新教出版社pp.218-219.
- (13) K・コッホ『預言者I』荒井章三, 木幡藤子訳, 教文館pp.17-22.
- (14) H・ガスター『世界最古の物語』矢島文夫訳, 社会思想社pp.304.
- (15) 石田英一郎「月と不死」『民族学研究』pp.1-10.
- (16) エリアーデは次のように述べている。「そして他方, 歴史的悲劇が一つの歴史を貫く意義, 現在の段階では人類につねにあらわに見られなくとも, その意義を有することの確信を獲るのは, 実に神の存在を前提として可能となるのである。これ以外のいかなる現代人の立場も終局においては絶望にしか導かない。」(『永遠回帰の神話』堀一郎訳, p. 207.)